

東京女子医科大学糖尿病センター内科、三重大学医学部産科婦人科学講座

佐中真由実、豊田 長康

1921年にインスリンが発見される以前は、糖尿病妊婦の死亡率は約40%、胎児・新生児死亡率は約60%であったという記録が残っている。インスリンの発見以後母体死亡率は激減し、現在では糖尿病妊婦が死亡することは稀なこととなった。一方胎児・新生児死亡率もインスリンの発見以後徐々に低下したが、母体死亡率の低下に比べると、その低下の速度は緩やかであり、比較的良好な成績が得られるようになったのは最近のことである。現在でも、糖尿病妊婦の発見の遅れや無視・軽視されたような場合に、胎児・新生児死亡や重篤な障害を生じた報告が散見される。胎児・新生児合併症を防止するには、妊娠前も含めて妊娠中の厳格な血糖管理が要求されるが、本シンポジウムでは最近の治療法・管理法の進歩にもとづいた糖尿病妊婦の理想的な治療法・管理法について、内科側および産科側の視点より発表・討論をしていただく予定である。